

2026_0531「残照の浅間山千トン岩」日々の理科 4312号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

嬭恋村大カインコから夕暮れの浅間山を眺めると、火口壁の稜線上に小さな岩影が浮かび上がります。これが「千トン岩」と呼ばれる巨大な「火山岩塊」です。一見すると人の背丈ほどの岩にも見えますが、実際には家屋にも匹敵する大きさを持ち、推定では数千トンに達すると考えられています。1950年（昭和25年）9月23日午前4時37分の爆発的噴火によって火口内部から吹き飛ばされ、現在の位置に留まったとされる岩で、浅間山の激しい活動の歴史を今に伝える存在です。

夕陽が西へ傾くと、黒々とした火山砂礫の斜面に柔らかな残照が差し込みます。日中には単調に見える山肌も、斜光を受けることで細かな起伏や浸食の筋が浮かび上がり、巨大な火山の呼吸を感じさせます。千トン岩の周囲にはほとんど植生がなく、噴火によって形成された若い火山地形がそのまま残されています。風に揺れる手前のシラカバの葉との対比が、山の荒々しさをいっそう際立たせています。

私はこの光景を見るたびに、火口から吹き飛ばされた巨岩が奇跡のような均衡の上に静かに留まっていることに驚かされます。数十年という人の時間から見れば変わらぬ姿ですが、火山の歴史の中ではほんの一瞬の景色なのかもしれません。夕暮れの光を受けた千トン岩は、静寂の中に噴火の記憶を秘めながら、浅間山の長い物語を語り続けているように見えました。

(2026年5月下旬／群馬県嬭恋村)

